

## ウィトゲンシュタインの 「ポイントが分かる」ためのノート

川 崎 誠

### はじめに

マルカムは『論理哲学論考』——以下『論考』と略——と『哲学探究』——以下『探究』と略——について、次のように述べている。

『探究』において述べられているウィトゲンシュタインの所見は、どこにポイントがあるのか、分からない事が多いのである。しかし、『論考』によって深く印象づけられた人が、『探究』は、『論考』の基本思想に対する、どんなに激しい猛攻撃であるかに気がつき始めれば、その人からは、「ポイントが分からない」という感じは消え失せ、それら二つの根本的に異なった哲学的展望の間の劇的対立に気づき始めるのである。(序文 p.14)

けれどもマルカム自身書いているように、この見解の前提となる事柄において、ウィトゲンシュタイン研究者たちの意見は一致しない。すなわち「ウィトゲンシュタインが『探究』を書いたとき、彼は『論考』について正確な知識を有していた」のかどうかということだが、するとそうした意見の不一致そのものが『論考』および『探究』に対する研究者たちの理解の不一致を表わしている。二つのテキストの把握において共通理解が存するならば、先の問いへの回答も自ずと収斂されるはずだからである。つまり『探究』に限らず、ウィトゲンシュタインのテキストは総じて「どこにポイントがあるのか、分からない事が多い」というのが未だ研究の現状なのである。ふたたびマルカムに登場願えば、「ウィトゲンシュタインは読まれてきたが、しかし、

そこで言われている事は、消化されてはいないのである。よく言われる事だが、ウィトゲンシュタインは理解されずに取り入れられてきたのである」(同 p.16)。

そこで本稿では、ちょうど 100 年前に口述された「ノルウェーで G.E.ムーアに対して口述されたノート(1914 年 4 月)」Notes Dictated to G. E. Moore in Norway — 以下「ムーア」と略 — を採り上げ、「ウィトゲンシュタインの所見のポイントが分かる」読解を示してみようと思う。具体的には「ムーア」の叙述を『資本論』のそれと対比し、両者に共通する論理を探るのである。

### (1) 118d

はじめに 118d を採り上げる。「118d」とは「ムーア」を付録にもつ *Notebooks 1914-1916* (第 2 版) の頁数とパラグラフ番号であり、118 頁第 4 パラグラフを意味する。また①等は文の番号を表わす。

118d ①論理的関数はすべて、相互に前提しあう。Logical functions all presuppose one another. ②p が無意義なら  $\sim p$  が無意義である、と見ることができるとまったく同様に Just as we can see  $\sim p$  has no sense, if p has none ; ③ $\sim p$  が無意義なら p が無意義であると語ることも可能である。so we can also say p has none if  $\sim p$  has none. ④この場合は、 $\phi a$  と a に関してはまったく異なる The case is quite different with  $\phi a$ , and a; ⑤というのは、ここでは  $\phi a$  は a を前提するものの、a は  $\phi a$  から独立に意味をもつからである。since here a has a meaning independently of  $\phi a$ , though  $\phi a$  presupposes it.

この叙述と対比させる『資本論』は、第 1 部「資本の生産過程」の第 4 章「貨幣の資本への転化」第 3 節「労働力の購買と販売」の 9 パラグラフ全文である。①等はここでも文番号。

<資> ①他方、貨幣を考察するならば、貨幣は商品交換の一定の発展程度を前提する。Oder betrachten wir das Geld, so setzt es eine gewisse Höhe des Waarenaustausches voraus. ②貨幣の特殊な諸形態——単なる商品等価物、または流通手段、または支払手段、蓄蔵貨幣、世界貨幣——は、いずれかの機能の作用範囲の違いと相対的優越とに応じて、社会的生産過程のきわめて異なる諸段階を示している。Die besondern Geldformen, bloßes Waarenäquivalent, oder Cirkulationsmittel, oder Zahlungsmittel, Schatz und Weltgeld, deuten, je nach dem verschiedenen Umfang und dem relativen Vorwiegen einer oder der andren Funktion, auf sehr verschiedene Stufen des gesellschaftlichen Produktionsprocesses. ③にもかかわらず、経験によれば、これらのすべての形態が形成されるためには、商品流通の比較的わずかな発達で十分である。Dennoch genügt erfahrungsmäßig eine relativ schwach entwickelte Waarencirkulation zur Bildung aller dieser Formen. ④資本については事情は異なる。Anders mit dem Kapital. ⑤資本の歴史的事実諸条件は、商品流通および貨幣流通とともに定在するものでは決してない。Seine historischen Existenzbedingungen sind durchaus nicht da mit der Waaren- und Geldcirkulation. ⑥資本は、生産諸手段および生活諸手段の所有者が、みずからの労働力の売り手としての自由な労働者を市場で見いだす場合にのみ成立するのであり、そして、この歴史的條件は一つの世界史を包括する。Es entsteht nur, wo der Besitzer von Produktions- und Lebensmitteln den freien Arbeiter als Verkäufer seiner Arbeitskraft auf dem Markt vorfindet, und diese eine historische Bedingung umschließt eine Weltgeschichte. ⑦それゆえ、資本は、最初から社会的生産過程の一時代を告示する。Das Kapital kündigt daher von vorn herein eine Epoche des gesellschaftlichen Produktionsprocesses an.

まず使用される語に注目する。「ムーア」では①「相互に前提しあう presuppose one another」・④「この場合は、 $\phi a$  と  $a$  に関してとはまったく異なる The case is quite different with  $\phi a$ , and  $a$ 」とあり、『資本論』は①

「前提する voraussetzen」・④「資本については事情は異なる Anders mit dem Kapital.」である。これらは両テキストの対応関係を示唆する。つまり両者は①から④まで一文対一文で対応し、その後「ムーア」⑤が『資本論』⑤～⑦に対応する、そのように読める。詳しく述べよう。

「ムーア」①：「論理的関数はすべて、相互に前提しあう。」⇔『資本論』①「他方、貨幣を考察するならば、貨幣は商品交換の一定の発展程度を前提する。」

はじめに『資本論』の「他方」について説明したい。7 パラグラフで「貨幣または商品の所有者」と「自分の労働力の所有者」が対比され、8 パラグラフでは — 労働力も商品であるから — およそ「商品としての生産物の定在のうちには、一定の歴史的條件が包み込まれている」ことが説かれた。そこで明らかになったのは、(1)「もしわれわれが、生産物のすべてが、またはその多数だけでも、商品の形態をとるのはどのような事情のもとにおいてであるかを探究していたら、それは、まったく独特な生産様式である資本主義的生産様式の基礎上でのみ起こるということが明らかになったことであろう」こと、(2)「生産物量の圧倒的大部分が直接に自家需要に向けられていて商品に転化していなくても、したがって社会的生産過程がその全体的な広さと深さの点でまだまだ交換価値に支配されているというにはほど遠くても、商品生産および商品流通は生じうる」こと、この二点である。かく商品についての考察が先行し、それを承けて9パラグラフが「他方、貨幣を考察する」のである。

だがなぜ「一方の商品、他方の貨幣」なのか。商品がその機能の差異に応じて二種に分かれるからである。すなわち諸商品と貨幣商品、これである。マルクスは、「20 エレのリンネル=1 着の上着」で表現される「簡単な価値形態」について説いていた。

<資> ここでは、種類を異にする二つの商品 A と B、われわれの例ではリンネルと上着とは、明らかに、二つの異なった役割を演じている。リンネルはその価値を上着で表現し、上着はこの価値表現の材料として役立っている。(p.83)

「等価物として機能する funktioniert als Äquivalent」(同) 上着は即自的  
には貨幣商品だが、その「貨幣」において「商品世界の統一的な相対的価値  
形態は客観的固定性と一般的社会的妥当性 objektive Festigkeit und  
allgemein gesellschaftliche Gültigkeit とを獲得する」(p.118)。このことが  
「商品交換の一定の発展程度を前提する」ことは言うまでもない。そして商  
品の価値関係において

〈資〉 相対的価値形態と等価形態とは、同じ価値表現の、互いに依存  
し合い、互いに制約し合う、不可分の契機 zu einander gehörige, sich  
wechselseitig bedingende, unzertrennliche Momente であるが、同時に、  
互いに排除し合う、あるいは対立し合う、両極端 zugleich einander  
ausschließende oder entgegengesetzte Extreme、すなわち両極である。  
(p.83)

のだから、諸商品と貨幣商品のそれぞれの機能 Funktion は「相互に前提し  
あう」。これは「ムーア」①「論理的関数 logical functions はすべて、相互  
に前提しあう」の説くところと別のことではない——‘function’をその論理に  
着目して把握するゆえ「論理的関数」である。後に触れるところがある——。

「ムーア」②：「 $p$  が無意義なら  $\sim p$  が無意義である、と見ることができる  
とまったく同様に；」 $\Leftrightarrow$ 『資本論』②「貨幣の特殊な諸形態——単なる商品  
等価物、または流通手段、または支払手段、蓄蔵貨幣、世界貨幣——は、い  
ずれかの機能の作用範囲の違いと相対的優越とに応じて、社会的生産過程の  
きわめて異なる諸段階を示している。」

『資本論』に謂う「社会的生産過程のきわめて異なる諸段階」とは、上の  
8 パラグラフ (2) に説かれた「社会的生産過程がその全体的な広さと深さの  
点で交換価値に支配されている」段階と「まだまだ交換価値に支配されてい  
るというにはほど遠い」段階とである。つまり『資本論』②は簡約して次の  
ように表わされる：機能の差異が存在すれば、社会的生産過程の差異が存在  
する。さらに対偶をとる：社会的生産過程の差異が存在しないなら、機能の  
差異は存在しない。いま「存在する」：有意義、「存在しない」：無意義とだけ

ば<sup>(1)</sup>、『資本論』②は「ムーア」②「 $p$ が無意義なら $\sim p$ が無意義である、と見ることができる」を説いている。

「ムーア」③「 $\sim p$ が無意義なら  $p$ が無意義であると語ることも可能である。」⇔『資本論』③「にもかかわらず Dennoch、経験によれば、これらのすべての形態が形成されるためには、商品流通の比較的わずかな発達で十分である。」

「ムーア」では②と③が「逆」である：「 $p$ が無意義なら $\sim p$ が無意義である、と見ることができる、逆に dennoch、 $\sim p$ が無意義なら  $p$ が無意義であると語ることも可能なのである」。つまり②と③の繋がりには『資本論』のそれと同じである。そして『資本論』では「これらのすべての形態が形成される」のだから「機能の差異は存在しない（無意義である）」が、するとそれをもたらす「商品流通の比較的わずかな発達」（存在しない）について、これを「語ることも可能である」。つまり「 $\sim p$ が無意義なら  $p$ が無意義であると語ることも可能である」。

「ムーア」④「この場合は、 $\varphi a$  と  $a$  に関してとはまったく異なる；」⇔『資本論』④「資本については事情は異なる。」

「まったく異なる」と「事情は異なる」の対応については上に触れた。「 $\varphi a$  と  $a$ 」：「資本」の対応関係については次で述べる<sup>(2)</sup>。

「ムーア」⑤「というのは、ここでは  $\varphi a$  は  $a$  を前提するものの、 $a$  は  $\varphi a$  から独立に意味をもつからである。」⇔『資本論』⑤～⑦「資本の歴史的実存諸条件は、商品流通および貨幣流通とともに定在するものでは決してない。資本は、生産諸手段および生活諸手段の所有者が、みずからの労働力の売り手としての自由な労働者を市場で見いだす場合にのみ成立するのであり、そして、この歴史的条件は一つの世界史を包括する。それゆえ、資本は、最初から社会的生産過程の一時代を告示する。」

「 $\varphi a - a$ 」に対応するのが「資本—自由な労働者」である。次のように説かれる事情があるからである — 趣旨は『資本論』⑥と同じ —。

<資> ウェイクフィールドは、植民地でまず第一に、ある人が貨幣、生活手段、機械その他の生産手段を所有していても、その補足物である賃

労働者 — 自分自身を自由意志で売ることを余儀なくされている別の人間 — がいなければ、この所有はまだその人に資本家の刻印を押すものではない、ということを見つけた。彼が発見したのは、資本は物ではなく、物を通じて媒介された人と人とのあいだの社会的関係 *gesellschaftliches Verhältnis* である、ということである。(p.1310)

「賃労働者がいなければ、生産手段等の所有者はまだ資本家でない」のだから、「資本」は「賃労働者」を前提するものの、「賃労働者」は「資本」から独立に意味をもつ・すなわち「歴史的条件 *eine historische Bedingung*」である<sup>(3)</sup>。つまり「資本は、最初から社会的生産過程の一時代を告示する」<sup>(4)</sup>なのであって、これは「論理的関数はすべて、相互に前提しあう」こととは区別される（事情は異なる *Anders*）。

さて独語‘*Bedingung*’は「条件」ないし「制約」の訳語をもち、その「制約」は‘*Konvention*’の訳語としても用いられる<sup>(5)</sup>。そして‘*Konvention*’の淵源たるラテン語‘*convenire*’は独語‘*entsprechen*’に対応する。という次第で、次には 112f・113a を採り上げよう。

## (2) 112f

112f ①単純者についての何が実在性についての何を語っているのか、を語ることによって比較の方法を固定すること、このことだけがなお残されている。It only remains to fix the method of comparison by saying *what* about our simples is to *say* what about reality. ②例えば長さの等しくない二本の線分を採り上げると仮定せよ E.g., suppose we take two lines of unequal length ; ③そして短い方がそれであるところの長さだという事実が、長い方がそれであるところの長さだということを意味していると語れ。and say that the fact that the shorter is of the length it is is to mean that the longer is of the length *it* is. ④そのときわれわれは短い方の線分の意味について、今与えたような種類の約定を樹立したことになる。We should then have established a convention as to the meaning of the shorter, of the sort

we are now to give.

対応する『資本論』は同じく第4章の第1節「資本の一般的定式」17パラグラフの全文である。なお「資本の一般的定式 die allgemeine Formel des Kapitals」が「ムーア」で説かれる「命題の一般的形式 the general form of a proposition」(113b)に通じることは言うまでもない<sup>(6)</sup>。

<資> ①W-G-Wにおいて、両極のWとW、たとえば穀物と衣服とが、量的に異なった大きさの価値であるということも、確かにありうる。Es ist zwar auch möglich, daß in G-W-G die beiden Extreme, W, W, z.B. Korn und Kleider, quantitativ verschiedene Werthgrößen sind. ②農民が自分の穀物をその価値よりも高く売ったり衣服をその価値よりも安く買ったりすることはありうる。Der Bauer kann sein Korn über dem Werth verkaufen oder die Kleider unter ihrem Werth kaufen. ③また彼のほうが、衣服商人にだまされることもありうる。Er kann seinerseits vom Kleiderhändler geprellt werden. ④とはいえ、このような価値の不一致は、この流通形態そのものにとってはまったく偶然であるにすぎない。Solche Werthverschiedenheit bleibt jedoch für diese cirkulationsform selbst rein zufällig. ⑤その両極、たとえば穀物と衣服とがたとえ等価値物であっても、この流通形態がG-W-Gのように無意味になってしまうことは決してない。Sinn und Verstand verliert sie nicht schier, wie der Proceß G-W-G, wenn die beiden Extreme, Korn und Kleider z.B., Aequivalente sind. ⑥両極が等価値だということは、ここではむしろ正常な経過の条件なのである。Ihr Gleichwerth ist hier vielmehr Bedingung des normalen Verlaufs.

118d でのような一文対一文ではないが、ここでも二つのテキストは明らかに対応している。

『資本論』での「比較」は①「量的に異なった大きさの価値である穀物と衣服」である。その場合④「価値の不一致は、この流通形態そのものにとつ



てはまったく偶然であるにすぎない」のであり、ということとは「W-G-W」が「固定的な fixed 比較の方法」だということである。⑤「両極が等価物である」ことが確立してこそ、「価値の不一致」は偶然と言われるからである。⑥「両極が等価値だということは、ここではむしろ正常な [基準に合った] normal 経過の条件なのである」と説かれる所以だが、「正常な経過の条件 *Bedingung*」はすなわち正常に経過するための「約定」である。なお独語訳「ムーア」で‘fix’は‘festlegen’と訳されすなわち‘endgültig bestimmen’だが、‘endgültig’でありうる規定とはそれが‘Norm’に合致する場合であろう。

「ムーア」である。「比較」——ここでは「実在性と命題との比較」(112e)——が外的・偶然的であればその価値は低い。他方で「固定的な比較」がいれば偶然を超えることは上に述べた。だから①が説くのは、「単純者についての何が実在性についての何を語っているのか、を語る」ことが偶然を超えることである。そして「比較の可能性はわれわれがそれによって単純者（名と関係）our simples (names and relations) に意味を与えた、その約定に依存している」(112e) から、①「比較の方法を固定する」ことはすなわち④「われわれが約定を樹立する」ことである。

さて②「長さの等しくない二本の線分を採り上げる」ことは「W と W、たとえば穀物と衣服」を採り上げる（交換する）ことに対応する。ただし二つの W は「W-G-W」の「両極」である。ゆえにここでの交換は、例えば「1 クォーターの小麦=1 着の上着」という「簡単な価値形態」でなく、「1 着の上着= または 1 クォーターの小麦= または等々の商品=2 オンスの金」という「貨幣形態」においてのことである。つまり「1 クォーターの小麦=2 オンスの金 であり、1 着の上着=2 オンスの金 であれば、1 クォーターの小麦=1 着の上着 である」(p.114) と謂われる、その「1 クォーターの小麦=1 着の上着」が件の関係である。

そこで③「1 クォーターの小麦がそれであるところの価値の大きさだということ事実が、1 着の上着がそれであるところの価値の大きさだということの意味している the fact that 1 quarter corn is of the magnitude of value it is is to mean that 1 coat is of the magnitude of value it is と語る」としよう——1 クォーターの小麦の「価値の大きさ *Werthgröße*」が「事実」・1 着の上着の「価

値の大きさ」が「それである」とされる理由は、次のようだと解される。まず1クォーターの小麦は「与えられた分量のある使用対象 ein *Gebrauchsgegenstand von gegebenem Quantum*」(p.91)であるから、その「価値の大きさ」は「事実」である。そしていま問題は、その「価値の大きさ」がどの位の「価値の大きさ」と交換されるかということ・穀物価値と衣服価値の較量である。これは所与ではないので「事実」とは呼ばない。「それ……事実」としない所以である——。ここで「それであるところの価値の大きさ」とは④「価値の不一致が偶然である」を承けて謂われるのだから、かく「語る」ことは⑤「穀物と衣服とが等価物である」と語ることに他ならない。

かくして⑥「われわれは両極が等価値だということの意味について、今与えたような種類の約定を樹立した」のであり、換言して①「(命題の)単純者についての何(「1クォーターの小麦=1着の上着」であること)が実在性(1クォーターの小麦と1着の上着および両者の関係)についての何(等価値であること)を語っているのか、を語ることによって比較の方法を確定した」のである<sup>(7)</sup>。

### (3) 113a

113a このことより次のことが帰結する、すなわち「真」と「偽」は、命題が意味をもつときに、われわれが真であるともあるいは偽であるとも語ることのできる、そうした種類の命題の偶然的な諸々の固有性ではない：これに反して、意味をもつことは、真であることあるいは偽であることを意味する：真であることあるいは偽であることが命題の実在性に対する関係を現実的に構成しており、われわれはその関係を、命題は意味(意義)をもつ、と語ることによって意味する。From this it results that “true” and “false” are not accidental properties of a proposition, such that, when it has meaning, we can say it is also true or false : on the contrary, to have meaning *means* to be true or false : the being true or false actually constitutes the relation of the proposition to reality, which we mean by saying that it has meaning (*Sinn*).

112f に直続する 113a であるので、対比する『資本論』も第 1 節「資本の一般的定式」の 18 パラグラフである。

〈資〉 ①買うための販売の反復または更新は、この過程そのものと同じく、この過程の外にある究極目的、消費に、すなわち特定の諸欲求の充足に、その限度と目的とを見いだす。Die Wiederholung oder Erneuerung der Verkaufs um zu kaufen findet, wie dieser Proceß selbst, Maß und Ziel an einem außer ihm liegenden Endzwecke, der Konsumtion, der Befriedigung bestimmter Bedürfnisse. ②これに反して、販売のための購買では、始まりも終わりも同じもの、貨幣、交換価値であり、そしてすでにこのことによって、その運動は無限である。Im Kauf für den Verkauf dagegen sind Anfang und Ende dasselbe, Geld, Tauschwerth, und schon dadurch ist die Bewegung endlos. ③確かに、G が  $G + \Delta G$  になり、一〇〇ポンド・スターリングが一〇〇プラス一〇ポンド・スターリングになってはいる。Allerdings ist aus G,  $G + \Delta G$  geworden, aus den 100 Pfd. St.,  $100 + 10$ . ④しかし、単に質的に考察すれば、一一〇ポンド・スターリングは一〇〇ポンド・スターリングと同じもの、すなわち貨幣である。Aber bloß qualitativ betrachtet, sind 110 Pfd. St. dasselbe wie 100 Pfd. St., nämlich Geld. ⑤また量的に考察しても、一一〇ポンド・スターリングは、一〇〇ポンド・スターリングと同じようにある限定された価値額である。Und quantitativ betrachtet, sind 110 Pfd. St. eine beschränkte Werthsumme wie 100 Pfd. St. ⑥もし一一〇ポンド・スターリングが貨幣として支出されるとすれば、それは自分の役割を捨てることになるであろう。Würden die 110 Pfd. St. als Geld verausgabt, so fielen sie aus ihre Rolle. ⑦それは資本であることをやめるであろう。Sie hörten auf Kapital zu sein. ⑧もし流通から引きあげられれば、それは蓄蔵貨幣に石化して、最後の審判の日まで蓄え続けられてもびた一文もふえはしない。Der Cirkulation entzogen, versteinern sie zum Schatz und kein Farthing wächst ihnen an, ob sie bis zum jüngsten Tage fortlagern. ⑨ひとたび価値の増殖なるものが問題となれば、増殖の欲求は、一一〇ポ

ド・スターリングの場合も一〇〇ポンド・スターリングの場合と同じである。というのは、両者ともに交換価値の限定された表現であり、したがって両者ともに、大きさの増大によって富自体に近づくという同じ使命をもつからである。Handelt es sich also einmal um Verwerthung des Werths, so besteht dasselbe Bedürfniß für die Verwerthung von 110 Pfd. St. wie für die von 100 Pfd. St., da beide beschränkte Ausdrücke des Tauschwerths sind, beide also denselben Beruf haben sich dem Richthum schlechthin durch Größenausdehnung anzunähern。⑩確かに、最初に前貸しされた価値である一〇〇ポンド・スターリングは、流通においてその価値につけ加えられる一〇ポンド・スターリングの剰余価値から一瞬のあいだ区別されはするが、しかしこの区別はすぐまた消えてなくなる。Zwar unterscheidet sich für einen Augenblick der ursprünglich vorgeschossene Werth 100 Pfd. St. von dem in der Cirkulation ihm zuwachsenden Mehrwerth von 10 Pfd. St., aber dieser Unterschied zerfließt sofort wieder。⑪過程の終わりには、一方の側に一〇〇ポンド・スターリングというもとの価値が、そして他方の側には一〇ポンド・スターリングという剰余価値が出てくる、というわけではない。Es kommt am Ende des Processes nicht auf der einen Seite der Originalwerth von 100 Pfd. St. und auf der andren Seite der Mehrwerth von 10 Pfd. St. heraus。⑫出てくるのは、一〇ポンド・スターリングという一つの価値であって、それは、最初の一〇〇ポンド・スターリングと同じく、まったく価値増殖過程を開始するのに適した形態にある。Was herauskommt ist Ein Werth von 110 Pfd. St., der sich ganz in derselben entsprechenden Form befindet, um den Verwerthungsproceß zu beginnen, wie die ursprünglichen 100 Pfd. St. ⑬運動の終わりには、貨幣がふたたび運動の始まりとして出てくる。Geld kommt am Ende der Bewegung wieder als ihr Anfang heraus。⑭それゆえ、販売のための購買が行なわれる各個の循環の終わりには、おのずから新たな循環の始まりをなす。Das Ende jedes einzelnen Kreislaufs, worin sich der Kauf für den Verkauf vollzieht, bildet daher von selbst den Anfang eines neuen Kreislaufs.

⑮単純な商品流通 — 購買のための販売 — は、流通の外にある究極目的、すなわち使用価値の取得、欲求の充足、のための手段として役立つ。Die einfache Waarencirkulation — der Verkauf für den Kauf — dient zum Mittel für einen außerhalb der Cirkulation liegenden Endzweck, die Aneignung von Gebrauchswerten, die Befriedigung von Bedürfnissen.

⑯これに反して、資本としての貨幣の流通は自己目的である。というのは、価値の増殖は、この絶えず更新される運動の内部にのみ実存するからである。Die Cirkulation des Geldes als Kapital ist dagegen Selbstzweck, denn die Verwerthung des Werths existirt nur innerhalb dieser stets erneuerten Bewegung. [原書は一文] ⑰それゆえ、資本の運動には際限がない。Die Bewegung des Kapitals ist daher maßlos.

「ムーア」の前半「このことより……固有性ではない」が対応するのは、『資本論』の長い叙述のうち①のみである。すなわち「この過程の外にある究極目的、消費 die Endzwecke, der Konsumtion」は、それが「目的 Zwecke」（複数）であることでは「諸々の固有性」と言えようが、しかし「外にある außer liegend」のだから「この過程」にとっては「偶然的」である。そして偶然的・外的なことを「われわれが語ることができる」のは、そこに「その限度 [度量] Maß」が存するからである。つまり「外にある」ものを‘messen’してこそそれについて「語ることができる」のであって、さもなければできない。的を射るためには距離・風向き等を測らねばならないのと、これは基本的に変わらない。

二つのテキストの「これに反して on the contrary ; dagegen」以下の読解については『大論理学』の参照がその理解を助ける<sup>(8)</sup>。本質論第二編「現実性」の第1章「絶対的なもの」の「A 絶対的なものの開陳」6 パラグラフ第5文である。

<大> — それだから絶対的なものを開陳するあの運動だけでなく、ひたすらそのもとへと到達したこの絶対的なものそのものもまた不完全なものである。Nicht nur jenes Auslegen des Absoluten ist daher ein

Unvollkommenes, sondern auch dies *Absolute* selbst, bei welchem nur *angekommen* wird.

「それだから」とは、前文「絶対的なものは反省および規定する運動一般の否定的なものにすぎない」を承けての「それだから」である。そして『大論理学』の叙述に対しては以文社版訳者（寺沢恒信）が注を付している。まず「てもと」ということについて。

「そのてもと」と訳した原語は“*bei sich*”である。これは、「未展開の姿にある自己のもつて」を意味する“*an sich*”とはことなつて、「あるべき姿にある自己のもつて」・「展開され・充実された姿にある自己のもつて」を意味する。“*bei sich*”にあるということは、そこから何か別の状態へと移つてゆかなければならないという欠乏の状態にあるのではなく、自足した状態にあること、*at home* の状態にあることを意味する。(p.383 訳者注 21)

次に、「てもとへと到達したこの絶対的なものそのものが不完全なものである」ことについて。

自足した状態にある絶対的なものは、自足した状態にあるのだから、自己から対立および多様態を展開する原因ではない。そして、このような原因でないことが、それが不完全なものであるゆえんである。すなわち、絶対的なものは自足した状態にあるがゆえに、不完全なものなのである。

(p.383 訳者注 22)

②「販売のための購買では、始まりも終わりも同じもの、貨幣、交換価値である」のだから、「その運動」は「そこから何か別の状態へと移つてゆかなければならないという欠乏の状態にあるのではなく、自足した状態、*at home* の状態にある」。つまり⑭「販売のための購買が行なわれる各個の循環の終わりは、おのずから新たな循環の始まりをなす」<sup>(9)</sup> のであるから、この「循環」(*G-W-G'*) は「てもとへと到達した絶対的なものそのもの」として「不

完全なもの」である。ここに謂う「不完全」とは「没度量」(⑩「資本の運動には際限がない *maßlos*)」のそれである<sup>(10)</sup>。

「ムーア」が「(命題が) 意味をもつことは、真であることあるいは偽であることを意味する」と説くとき、同じ論理が見出される。「意味をもつこと」が「意味すること (意味をもつこと)」だというのだから、「意味をもつ運動 to have meaning」もまた「てもとへと到達した絶対的なものそのもの」として「不完全なもの」・際限のない運動である。

その際限のない運動 ( $G-W-G'$ ) のもとで、⑫「一〇ポンド・スターリングという一つの価値」は「最初の一〇〇ポンド・スターリングと同じく、まったく価値増殖過程を開始するのに適した形態にある *der sich ganz in derselben entsprechenden Form befindet*」が、‘*entsprechend*’であるものは「真」であり、‘*ungemäß*’であるものは「偽」である — ‘*gemäß*’は‘*entsprechend*’の類語であり、ラテン語‘*conveniens*’ (<*convenire*) に対応する — ⑧「蓄蔵貨幣」は後者であり、「一〇ポンド・スターリングという一つの価値」すなわち  $G'$  は前者である。

さて或るものが⑬「実存する [現実存在する] *existirt*」というのは、そのものの「実在性に対する関係 *the relation of the proposition to reality* が現実的である」ことだろう。その「現実性」について『大論理学』は次のように説く。

<大> 現実性は本質と現実存在との統一である；形態を欠いた本質と支えを欠いた現象とが — 換言すれば、規定を欠いた存立と存立を欠いた [不安定な] 多様態とが現実性のうちにそれらの真理態をもっている。  
(p.217)

そこで「真であることあるいは偽であることが命題の実在性に対する関係を現実的に *actually* 構成している」とは、現実存在する命題において真であることあるいは偽であることが本質的だ — したがって内的だ — 、このことを謂うに他ならない。つまり⑬「価値の増殖が、この絶えず更新される運動 — 資本としての貨幣の流通 — の内部にのみ実存する」ということは、

「真であること（価値増殖）が命題（G—W—G'）の实在性に対する関係を現実的に——その現実存在において本質的に——構成している」ということである。ここで「現実存在」は一〇〇ポンド・スターリングなり一〇ポンド・スターリングなりの「多様態」であり、⑨「両者ともに、大きさの増大によって富自体に近づくという同じ〔本質的〕使命をもつ」。

そして「その関係を、命題は意味（意義）をもつ *it has meaning (Sinn)*、と語ることによって意味する」については、ソシュール『一般言語学講義』から次の言語事実を引いておこう。

<講> 「妹」という観念は、その能記の役目をするひと続きの音 *s-ō-r* とは、どのような内部的関係によっても結ばれていない；それは他の随意のものによっても、けっこう表わされうるであろう：言語のあいだに差異のあることが、いや、諸言語の存在そのことが、その証拠である：所記「牝牛」は、国境のこちら側では能記 *b-ō-f (bœuf)* をもち、あちら側では *o-k-s (Ochs)* をもつ。

すなわち‘*sœur*’や‘*bœuf*’は「意味（意義）をもつ *has meaning (Sinn)*」が、それはあくまで一言語 *une langue*・フランス語 *langue française* の‘*convention*’においてのことである。その‘*convention*’を離れてはそれらが活用されることはなく、そのとき‘*sœur*’等も「現実的」でなくなる。これは、活用されることなき「埋蔵金（蓄蔵貨幣）*Schatz*」が「現実的」と言えないことに対応する。

## おわりに

ウィトゲンシュタインのテキストを『資本論』や『大論理学』を参照しつつ読むことは、これらのテキストをウィトゲンシュタインが実際に読んだと主張することではない。そうした主張には実証的な研究の裏付けが必要だが、本稿がそのような研究でないことは明らかだろう。

そうではなくて、本稿は「論理的構文論」の実践である。『論考』が述べて



いる。

3-33 論理的構文論においては記号の意味はいかなる役割も演じてはならない In der logischen Syntax darf nie die Bedeutung eines Zeichens eine Rolle spielen ; 論理的構文論は記号の意味を論じることなく提起されるものでなければならず、諸表現の記述を前提することだけが許される。sie muß sich aufstellen lassen, ohne daß dabei von der *Bedeutung* eines Zeichens die Rede wäre, sie darf *nur* die Beschreibung der Ausdrücke voraussetzen.

そしてこれと同じ趣旨のことが『資本論』でも説かれる。

<資> しかし、[20 エレのリンネル=1 着の上着 と] 質的に等置された二つの商品は同じ役割を演じるのではない。リンネルの価値だけが表現される。では、どのようにしてか？ リンネルが、その「等価物」としての、またはそれと「交換されうるもの」としての上着にたいしてもつ関連によって、である。この関係のなかでは、上着は、価値の実存形態として、価値物として、通用する。なぜなら、ただそのようなものとしてのみ、上着はリンネルと同じものだからである。他方では、リンネルそれ自身の価値存在が現われてくる。すなわち、一つの自立的表現を受け取る。なぜなら、ただ価値としてのみ、リンネルは、等価値のものとしての、またはそれと交換しうるものとしての上着と関連しているからである。たとえば、酪酸は、蟻酸プロピルとは異なる物体である。しかし、両者は、同じ化学的実体 — 炭酸 (C)、水素 (H) および酸素 (O) から成り立ち、しかも同じ比率の組成、すなわち  $C_4H_8O_2$  で成り立っている。いま酪酸に蟻酸プロピルが等置されるとすれば、この関係のなかでは、第一に、蟻酸プロピルは単に  $C_4H_8O_2$  の実存形態としてのみ通用し、第二に、酪酸もまた  $C_4H_8O_2$  から成り立っていることが述べられるであろう。すなわち、蟻酸プロピルが酪酸に等置されることによって、酪酸の化学的実体が、その物体形態から区別されて、表現されるであろう。(p.85)

ここでは「リンネル」と「酪酸」が同じ役割を演じ——それは無論、それぞれの「意味」が演じる役割ではない——、「上着」と「蟻酸プロピル」もまたそうである。すなわち後者の対が「価値の実存形態として、価値物として、通用し」、それがかく在ることで前者の対の「価値存在」が「その物体形態から区別されて、表現される」。経済的事実と化学的事実とは無論別物であるから、この命題が明かすのは、価値存在とその実存形態および両者の関係仕方・すなわちかく在ることの論理である。つまりここで「20 エレのリンネル=1 着の上着」は、その論理の把握に主眼を置く「論理的命題」である。

その「論理的命題の効用」については「ムーア」が説く。

112a 論理的命題の効用。非常に複雑な命題で、それを見ただけでは同語反復であることが分からないような命題もあろう；しかし同語反復を構成するためのわれわれの規則に従って、その命題を、或る他の命題から一定の操作で導出されうることが示される；したがって一つのことが他のことから帰結するというのを、他の仕方では見てとることができないときにも、この仕方で見えてとることができる。例えば、同語反復が  $p \supset q$  という形式のものなら、 $q$  が  $p$  から帰結することを見てとることができる；等々。

経済的事実の説明に化学的事実を援用する『資本論』の叙述がその一例であることは言うまでもない。

だがそもそも「論理的構文論」はなにゆえ何故なのか。これも『論考』序文が説いている。

この書物は哲学的な諸問題を扱い、そして——私が思うに——これらの問題提起がわれわれの言語の論理の誤解 *das Mißverständnis der Logik unserer Sprache* に基づいていることを示している。

つまり目指すところは「われわれの言語の論理の理解」にあるが、それは如何様にか。例えば『大論理学』に次の一節がある。

<大> ①定立された存在はまだ反省規定ではない、②それは否定一般として規定態にすぎない。[原書は二文] ③しかし定立する運動はいまや外的反省との統一のうちにある；④外的反省はこの統一において絶対的な前提する運動である、すなわち、反省の自己自身からつきはなす運動・あるいは反省そのものとしての規定態を定立する運動である。⑤定立された存在はだからして定立された存在そのものとしては否定である；⑥しかし[外的反省によって]前提された定立された存在としてはこの否定は自己へと反省した否定としてある。⑦こうして定立された存在は反省規定である。(p.40)

ここではわずか数個の文の間に「定立された存在はまだ反省規定ではない」が「こうして定立された存在は反省規定である」となり、かかる論理展開がヘーゲルの言葉によって説かれる。つまり論理は言葉であり、その言葉はヘーゲルが思考する言葉なのである。そうであれば「われわれの言語の論理の理解」とは、テキストに陳べられた著者の思考を追思惟することに他ならない——追思惟した結果著者の思考に賛同できない場合も当然ありうるが、これを「誤解」とは呼ばない。‘Nachdenken’を経た上での異論は誤解ではない——。

最後に「論理的構文論」を実践する上での留意点を述べておこう。便宜のために言語学的構文論と対比する。

構文論を理解するには、第一に構文論に関する知識が必要である。例えば渡辺実の構文論において「桜の花が咲く。」と「桜の花が咲く季節」とは、「素材表示」「統叙」の構文的職能が共通だが、前者の「陳述」・後者の「連体展叙」では区別される。しかしそもそも「構文的職能」に関する知識がなければ、こうした論の理解しえないこと言うまでもない。論理的構文論についても同様である。たとえテキスト間に論理的対応が存しても、そもそも論理を把握する力を欠いては話にならない。ここで「論理」とは上述した、著者の思考の論理である。

構文論を理解するのに必要な第二点は、日本語が分かることである。構文論的な知識があっても日本語が分かるのではない。逆である。日本語が分かってはじめてその構文も把握される（森重敏『日本文法』）。当然と言えば当然

のことだが、やはり強調しておく必要がある。というのは、ここで構文論の代わりに論理的構文論と置けばどうだろう。例えば「ムーア」と『資本論』の論理的対応にしても、その当否は両テキストを理解している者だけが判じうるはずである。だが実際にはどうか。『資本論』を読んだこともないままにウィトゲンシュタインとマルクスの対応などありえない、かく断ずる論者は少数ではない。

第三点は言語学を離れる。論理が言葉・思考と一体である以上、それは静的でなく動的な運動である。そこで論理的命題もまた、一般に単独の文において完結することなく、連文としての展開にその真理態をもつ。そうであれば論理的構文論の実践はテキスト間の一文対一文の対応に留まるべきでなく、テキスト全体の対応関係を丹念に辿らねばならない。たとえ「ムーア」のような短いテキストにしても、その論理の解明には長大な論を要するだろう。これは本稿が「ノート」に留まる所以でもある。

## 注

(1) 「命題とは「……である」と云ふ言表であり、肯定命題「である」est は勿論のこと、否定命題「でない」も実は「でないのである」non est と云ふことに他ならず、結局、何らかの意味での存在と云ふことに他ならない。それであるから、主語・述語の論理学と云ふことは、「ある」の論理学、つまり「存在の論理学」ontos logia 存在論 ontologia であると云ふことになる。」(松本正夫『「存在の論理学」研究』p.38) したがって「言表の様式は本来的には存在の様式と同一でなくてはならない。」(同 p.39)

(2) 118c に「同語反復（論理的命題のことではない not a logical proposition）」とあるように、 $\phi a$  は「論理的命題」である。つまり「論理的関数」と「論理的命題」とが 118d では対比されるのだが、この対比の意味するところは『資本論』の参照だけでは分かりにくい。その欠を補うのが言語事実の参照であり、例えばソシュールは『一般言語学講義』で次のように述べている——ただし同書の刊行は 1916 年であるから、「ムーア」口述時のウィトゲンシュタインはこれを読んでいない——

<講> さきに、ある演説のなかで引きつづきなんども発せられた *Messieurs!*

がいかにそれじたいと同一であるかを知ること、……（中略）……なにゆえに *chaud* が *calidum* と同一であるかを知ることにおとらず興味があると、いうことができたのは、このゆえである。第二問はじじつ第一問の延長であり、複合であるにすぎない。(p.253)

つまり第一問は共時論的に、第二問は通時論的に「同一性」（同語反復）を問うており、それぞれに求められる論理も異なる。共時論的同一性：論理的命題、通時論的同一性：論理的関数の対応が存する。

(3) ‘Bedingung’ 「条件・制約」について、『大論理学』は次のように説く。

<大> 根拠は自分の本質的な前提としての直接的なものへと関係しているが、この直接的なものは制約である。(p.134)

(4) 言語事実に関しても同様のことが言える。独語 *gast* の複数中高独語で *gasti* であったが、ウムラウト化によって *geste(Gäste)* となった。つまり *gasti* は「最初から独語の一時代を告示する」のである。

(5) ‘Bedingung’ が「制約」と訳される例に、本文で先に引いた「相対的価値形態と等価形態とは……互いに制約し合う、不可分の契機 *sich wechselseitig bedingende, unzertrennliche Momente* である」がある。また「制約」が‘Konvention’の訳語である例に次を挙げよう。『一般言語学講義』の“C’est à la fois un produit social de la faculté du langage et un ensemble de conventions nécessaires, adoptées par le corps social pour permettre l’exercice de cette faculté chez les individus.”は「それは言語能力の社会的所産であり、同時にこの能力の行使を個人に許すべく社会団体の採用した必要な制約の総体である。」(p.21) と邦訳され、また独語訳は“Sie ist zu gleicher Zeit ein soziales Produkt der Fähigkeit zu menschlicher Rede und ein Ineingreifen notwendiger Konventionen, welche die soziasle Körperschaft getroffen hat, um die Ausübung dieser Fähigkeit durch die Individuen zu ermöglichen.”である。

(6) さらに共時論的事実について謂われる「一般的なもの *le général*」にも通底するだろう。

(7) ここでの「約定の樹立」はつまり価値形態の「貨幣形態」への移行である。というのは、そこで

<資> 一般的等価形態は、いまや社会的慣習によって、商品金の独自の自然形態に最終的に癒着している。Die allgemeine Äquivalentform jetzt durch gesellschaftliche Gewohnheit endgültig mit der spezifischen Naturalform der Waare Gold verwachsen ist.

からである。‘gesellschaftliche Gewohnheit’が「社会的慣習」なら‘gesellschaftliche Konvention’もそうであり、つまり後者と同じく前者も「約定 convention」である。そしてその「約定」が「最終的に endgültig」金商品を一般的等価物たらしめる・すなわち一般的等価物として「固定する」。すなわち「約定の樹立」である。

(8) 『資本論』の叙述は『大論理学』のそれと論理的に対応する、というのが私見である。だから本文で先に引いた第1節17パラグラフは「A 絶対的なものの開陳」6パラグラフ第4文に対応する。

<大> 換言すれば絶対的なものは反省および規定する運動一般の否定的なものにすぎない。oder es ist nur das *Negative* der Reflexion und des Bestimmens überhaupt.

また第3節9パラグラフに対応するのは「C 絶対的なものの様態」3パラグラフ第3文である。

<大> — 第二に、開陳はそのさいにたんに外的なものにかかわるだけでなく、また様態はもっとも外的な外面態であるだけでなく、様態は、仮象としての仮象であるから、自己への復帰・自己自身を解消する反省である、そしてこのような反省として絶対的なものは絶対的な存在である。Zweitens hat sie es dabei nicht bloß mit *Äußerlichem* zu tun, und der Modus ist nicht nur die äußerste Äußerlichkeit, sondern weil er der Schein als Schein ist, so ist er die Rückkehr in sich, die sich selbst auflösende Reflexion, als welche das Absolute absolutes

Sein ist.

(9) この叙述は「ムーア」の次を想起させるだろう。

113b …… (前略) …… (定義“p”は真である=“p”.p. : “p”の代わりにここで命題の一般的形式を導入しなければならない、その限り。“p” is true=“p”.p.Def. : only instead of “p” we must here introduce the general form of a proposition.)

(10) 『大論理学』は次を説く。

<大> 最初にあった度量比例 *Maßverhältnis* は新しい度量比例に移って行くが、この新しい度量比例は最初のものに関して云えば没度量 *ein Maßloses* なのである。しかし、この新しい度量比例も、それ自身は同様にまた一つの向自有的な質である；この意味で、比率的実存相互の間の交替 *Abwechslung* が、また同様に比率的実存と、単にあくまでも量的でしかない諸比例との間の交替が生ずるが、— この交替は無際限に *ins Unendliche* 続く。(岩波版上の二、p.268)

そしてこの「無際限」は「否定の否定」を把握しないゆえである。ヘーゲルはスピノザを評して謂う。

<大> 「規定態は否定である」はスピノザの哲学の絶対的原理である；この真なる・かつ単一な洞察が実体の絶対的統一を基礎づけている。だがスピノザは規定態または質としての否定のもとに立ちとどまっている；彼は絶対的否定としての否定・すなわち自己を否定する否定の認識へと前進せず、それだから彼の実体は絶対的形式を含んでおらず、また実体の認識は内在的認識ではない。(p.228)

文献 (各文献からの引用に際しては、諸邦訳書の訳文を借用したことがある。また本文中、『資本論』『大論理学』『一般言語学講義』の引用頁数は邦訳書のそれである。なお『大論理学』からの引用で頁数だけを記したのは、以文社版第2巻からの引用である。)

- Hegel, G.W.F., *Wissenschaft der Logik I・II*, 1986, Suhrkamp, Frankfurt am Main. (武市健人訳『大論理学』全4巻 一九五六～一九六一年 岩波書店、寺沢恒信訳『大論理学』全3巻 一九七七～一九九九年 以文社)
- Marx, K., *Das Kapital*, 1991, Diez, Berlin. (資本論翻訳委員会訳『資本論』第一・二分冊 一九八二～三年 新日本出版社)
- Malcolm, N., *Nothing is Hidden*, 1986, Basil Blackwell, Oxford. (黒崎博訳『何も隠されてはいない』一九九一年 産業図書)
- 松本正夫『「存在の論理学」研究』第二版 一九六八年 岩波書店
- 森重敏『日本文法－主語と述語－』 一九六五年 武蔵野書院
- Saussure, F. de, *Cours de linguistique générale*, 1916, Payot, Paris. (小林英夫訳『一般言語学講義』改版 一九七二年 岩波書店)
- 渡辺実『国語構文論』 一九七一年 塙書房
- Wittgenstein, L., *Tractatus logico-philosophicus*, Suhrkamp Taschenbuch Wissenschaft 501
- Wittgenstein, L., Notes Dictated to G.E. Moore in Norway (April 1914), in *Notebooks 1914-1916*, 2nd Ed., 1979, Basil Blackwell, Oxford.

(本稿は2013年度専修大学研究助成〔個人研究〕による研究の成果の一部である)